

ラジオの中の劇場

—ラジオドラマの裏側—

吉川和夫

ラジオドラマをお聴きになったこと、あります。ラジオしか娯楽のなかった時代ならともかく、テレビ全盛の現代にラジオドラマなんてまだあるの、と思われるかも知れませんが、ご年配の方ならば「放送劇」と呼ばれ親しまれたものです。

この十数年の間に、ご縁あってNHKのラジオドラマ十数タイトルの音楽の作曲を担当させていただきました。これは楽しい仕事です。でも実際にドラマがどんなふうに出て来るのかご存じの方は少ないと思いますので、ラジオドラマ製作の裏側についてぼくの専門である音楽を中心にお話してみましよう。

まず、某月某日電話がかかってきます。知己のディレクター（演出家）からです。今度こういう作家のこういう内容のドラマを作る

ので音楽を書かないか、という打診です。この時点で台本が完全に出来上がっていることは、まずありません。第一稿ができて直しているところ、とか、原作が小説等ならば脚色者が原作を読んでいるところです、なんていう場合もあります。台本がオリジナルならば

出来上がりを待つしか仕方ありませんが、原作が出版されている作品ならば、早速本屋さんへ探しに出かけます。おかげで、それまで読む機会のなかった作品、ぼくの場合上林暁氏の短編とか、木崎さと子さんの中編とか数々の未知の作家と出会う機会が得られました。アゴタ・クリストフ『悪童日記』などは、「仕事で読んでいる」ことを忘れて読み耽り、ハッと気がついて、一体この作品がどんなラジオドラマになるんだろう、自分は一体どんな音楽を書くことになるんだろう、と茫然と

したこともあります。やがて台本が送られてきます（この間、演出家は脚色者とともにきつと大変な苦勞をしておられるのに違いありませんが、そこは省略）。演出家とお会いして、午後一杯くらいの時間をかけて打合せ。雑談を交えながらなのですが、これがとても

大切。雑談の間にこの作品がどんな仕上がりになればいいかを考えているのです。それと共にどの場面に音楽が必要かを大まかに決めていきます。また挿入する唄や、効果音的に使う既製の音楽が必要であればこれについても相談します。（宮尾登美子さんの「蔵」の時には、酒造唄が必要でした。伝統的な酒造唄そのままでは難しすぎるので、それをもとにぼくが新たに作曲した唄を役者さんたちに唄ってもらいました。）さて、台詞録音の日が来ます。この日は、スケジュールが空いて

いれはできるだけ立ち会うことにしています。出演の役者さんたちがどんなトーンで台詞を語り、どんな芝居をしているのか自分の耳で聴いておきたいからです。そして録音された台詞が編集されてはじめて、音楽に必要な寸法（秒数）が確定するわけですが……。『蔵』の場合を例に上げましょうか。九四年の四月七・八日に台詞収録、同十三日に音楽録音というスケジュールが決められています。つまり中四日しかありません。この作品は五回連続なので音楽ナンバーは五十曲近くあるのです。それを中四日で作曲するのは到底不可能です。だから、大体の長さの見当を付けて予め音楽のスケッチをしておき、編集が済み次第寸法を教えてもらい修正することになります。録音マイクを前にすると出演の役者さんたちは、どうしたってこちらの思惑どおりの長さで語ってはくれないので修正箇所統出となります。夜通し編集作業をしてくれた演出家から明け方ファックスで台詞の長さが送られてきます。それを受けてぼくも（時には二晩くらい）徹夜でスコアを書くことになりました。録音当日の朝、やっとの思いで出来上がった譜面を写譜屋さんのもとへファックスで送ります。録音の時演奏者が見るためのパ

ート譜を書いてもらうためです。そして夕方、演奏者がスタジオに集まってきて、パート譜の束を抱えた写譜屋さんが駆け込んで、いよいよ録音開始。演奏者たちは勿論その場で初めて見る楽譜です。しかも彼らの拘束時間はギャラとの関係で決められているので、のんびりしているわけにはいきません。『蔵』の五十曲が、演奏のクオリティを保つたうえで合計四時間で録音完了したのは、今思い出しても奇跡のようです。番組のクレジットに名前が出ることはありませんが、優秀な演奏家たちがぼくらの仕事を支えてくれるのです。ラジオドラマ製作の最終段階は「作成」と呼ばれる一日です。台詞、音楽、効果音などがそれぞれ別のテープに収録された十台ほどのデッキが並ぶなか、演出家がオーケストラの指揮者の如くスタートのタイミングを指示していきます。うまくいかなかったら再検討しながらやり直し。一気に結論めいたハナシになりますが、ラジオドラマの良いところの一つは実はとても小人数で製作されていることです。出演者、演奏者、アシスタントの人たちを除くと、主要スタッフは台本作者、演出家、作曲家、技術さん、音響効果さん、そして統括するプロデューサー、ここまででは

んの十人前後。だから、いろいろなスタッフの意見が反映でき、それぞれの力を出し合って製作が進められるのです。時には数百人の人が動き、演出家はその交通整理役に徹するものが精一杯という場合も多いテレビドラマと大きく違う点でしょう。

ラジオドラマって何げなしに聴き始めるんですけど、そのうちすぐ引き込まれちゃうものですね、と友人たちは揃って口にします。まさに「ラジオの中の劇場」。亡くなられた宇野重吉さんが、やはりぼくが音楽を担当した『兄の左手』という番組の台詞収録の時に「いやぁ、ラジオって久しぶりだったけど、やっぱり難しいねえ。まるごと（テレビで）写してくれた方がずっと楽だよ」と言っておられたのを懐かしく思い出します。宇野さんのような大ベテランにさえ全力投球を迫る真摯な劇場。最も身近にあり、具象でも抽象でもどんな場面をも描きだせる普遍的な想像力の劇場、それがラジオドラマの世界なのです。